

現代日本語における「V1+V2」型複合動名詞の意味形成¹

—V2 の意味特徴を中心に—

李慧

lihui13041002@gmail.com

キーワード：「V1+V2」型複合動名詞 複合動詞 完結性 スケール変化 事象構造

要旨

本稿は、日本語の複合動名詞 V1+V2（前項要素を V1、後項要素を V2 とする。以下同様）を成立させる要件、及び V1+V2 の結合が複合動詞となる場合との違いを解明することを目的とし、構成要素となる動詞の語彙の意味による分類を試みる。具体的には、意味上の主要部となる V2 を中心とし、動詞の状態変化（change of state）と継続/瞬時というアスペクトの特性の観点から、複合動名詞と複合動詞の違いを考察する。具体的には、Beavers (2013, 2008) が提案する、スケール変化によるアスペクト分類を導入することで説明する。完結的（+telic）かつ瞬間的（+punctual）、非完結的（+atelic）かつ継続的（+durative）のような性質を持つ動詞は複合動詞に出る傾向がある一方、完結的かつ継続的のような性質を持つ動詞は複合動名詞に出る傾向があることを示す。また、両者の違いは事象構造の面からも裏付けられる。とりわけ原因事象が語彙的に指定されるかどうかという点において、複合動名詞と複合動詞の V2 が対立する。本稿は、動詞の意味クラスの違いは複合語の語形成にも反映されることを示し、意味の観点から複合動名詞と複合動詞の違いを説明することの有効性を確かめる。

1. 問題提起

現代日本語の複合語には、二つの動詞から構成される V1-V2 型のものがある。(1) のように動詞として使われる複合動詞が 3000 語以上あり、加えて (2) のように「スル」を伴って用いるものも存在する。

- (1) 洗い落とす、切り倒す、転げ落ちる、叩き壊す、突き通す、抜き取る、舞い落ちる
- (2) 崩し書き、添い寝、立ち読み、立ち飲み、量り売り、回し飲み、持ち逃げ

本稿では、「立ち読み」のように「スル」形は取る（「立ち読みする」）が、複合動詞としては使われない語（「*立ち読む」）を複合動名詞と呼ぶ。

こうした複合動名詞と複合動詞の違いがどのようなメカニズムに起因するのかについて

¹ 本稿の作成にあたり、助言を下された方々に感謝の意を表したい。本稿は、科学研究費助成金（特別研究員奨励費 19J12422）による研究の成果の一部である。

は明確には分かっていない。本稿は、Beavers (2013, 2008) の提案する、スケール変化による語彙的アスペクトの分類を導入して、複合動名詞と複合動詞の対立を、それらの意味上の主要部である V2²の意味クラスの観点から検討する。なお、本稿で扱う複合動詞は影山 (1993) のいう語彙的複合動詞 (例:「押し開ける」、「揺り起こす」) に限る。

本稿の構成は次の通りである。2 節では、動詞の完結性に関する理論的枠組みを説明する。3 節では、複合動名詞と複合動詞における V2 のデータを観察し、意味特徴の違いをまとめる。4 節では、事象構造の面から両者の差異を考察する。5 節では、結論と今後の課題を述べる。

2. スケール変化によるアスペクトの分類

2.1. 完結性とアスペクト

完結性 (telicity) は動詞のアスペクトのクラスを区別するための重要な性質の 1 つである。動詞が完結的 (telic) であるかどうかは、継続時間表現 (*for an hour*) と時限表現 (*in an hour*) との共起関係を確かめることで判断できる (Dowty 1979)。例えば、完結的な述語は *for an hour* より *in an hour* との相性がよく、非完結的な述語はその逆になる。

- (3) a. John noticed the error in / ? for two minutes. (Achievement, telic)
 b. John built the shelves in/ ? for two hours. (Accomplishment, telic)
 c. John knew the answer for / ?? in an hour. (State, atelic)
 d. John ran around for / ?? in an hour. (Activity, atelic)

(Beavers 2013: 682)

日本語動詞については、影山 (1996) が同種のテストを提案している。以下の (4) に示すように、「～時間で」という時限表現が付加でき、終了解釈が可能であれば述語が完結的であるのに対して、「～時間」という継続時間表現が付加でき、動作・行為の継続と解釈される場合、述語が非完結的である。

- (4) a. 車を 3 分で車庫に入れた。
 (「3 分で」は車を車庫の中に入れるまでにかかった時間を表す)
 (cf. 「車を 1 時間車庫に入れた」では、「1 時間」は車が車庫の中に置かれていた時間を表す)
 b. 金属を数時間叩いた。*金属を数時間で叩いた。

(影山 1996 : 57)

² 「開け閉め」のように並列関係になるものも含むこととする。

(5-7) のように、述語の完結性は動詞によってさまざまである。(5a) では継続の解釈ができないが、(6a)、(7a) ではそれが可能である。

- (5) a. その重いドアを 30 秒閉めた。
読み：「30 秒」という継続時間副詞は、閉まっている状態が 30 秒続いたことを表す。その重いドアを閉める作業を継続したという解釈にはならない。
- b. その重いドアを 30 秒で閉めた。
読み：「30 秒で」という時限時間副詞はドアを閉めるのに 30 秒かかったことを表す。
- (6) a. その本を 1 時間読んだ。
読み：1 時間その本を読み続けたことを表す。
- b. その本を 1 時間で読んだ。
読み：1 時間かけてその本を読み終えたことを表す。
- (7) a. ?その豪華なマンションを 1 年間建てた³。
読み：1 年間そのマンションを建て続けたことを表す。
- b. その豪華なマンションを 1 年間で建てた。
読み：1 年間かけてそのマンションを建てたことを表す。

2.2. スケール変化から見る状態変化と完結性

Tenny (1994, 1995) は、アスペクトの完結性 (telicity) の尺度として、事象を時間軸上で測定する (measure out) ための、容量 (volume-like quantity)、属性 (property)、距離 (path) の 3 つのスケール (scale) を提案した。ここでは、本稿の内容に深く関連する容量と属性を紹介する⁴。

A. 容量 (volume-like quantity) : 述語が作成動詞 (creation verbs) や消費動詞 (consumption verbs) である場合、その動詞は、時間軸に沿って動詞が示す行為とともに増減する容量を持つものを、項として取る。例えば (8) のような場合である。

- (8) John ate (the) sandwiches.

B. 属性 (property) : 述語が状態変化動詞である場合、その動詞は、動詞が示す行為によっ

³ 「その豪華なマンションを 1 年間建てていた」であればより自然だという判断もある。

⁴ 3 つ目の距離は移動動詞に関与するものである。述語が移動動詞である場合、その動詞は、時間に沿ってその上を進行する線的な距離 (path) を持つものを、項として取る。

て変化しうる程度や段階性のある属性を持つものを、項として取る。(9) がその例である。

(9) John scrubbed the skin (clean).

(Beavers 2013: 685)

それを踏まえて、Beavers (2011) では、述語がスケールに沿って起きるときにどのような変化が生じるかについて論じられている。(10) に示すように、リンゴに対する peel という動詞は、その皮が完全に剥かれることを意味する。一方、これが cut のような動詞の場合には、そのきる程度が想定されない(何切れであるかがわからない)。hit の場合には、リンゴにも物が当たるのみで、なんらかの変化が起こることまでは要求されない。そして see では、リンゴに何か当てるが必要でない。これによって、述語が描写するイベントを測定するスケールにおいて、対象 (theme) x がスケールに特定のステージ (specific stage) に達成する場合、対象 x に量子化される変化 (quantized change) が起こるとされる。例えば、peel, break, shatter x のような場合である。その逆に、対象 x がスケールに特定の結果状態ではなく、ある程度変化 (some result stage) が起こった場合、非量子化される変化 (nonquantized change) と言われる。cut, widen, lengthen x などがその例である。このうち、量子化される変化が起こる述語の場合は、完結性を持つのである。

- (10) a. John peeled the apple.
 b. John cut the apple.
 c. John hit the apple.
 d. John saw the apple.

(Beavers 2013:688)

また、イベントは、スケールの複雑性の程度によって持続性 (durativity) の観点から分けることができると Beavers (2013) で指摘される。瞬間的イベント (punctual events) は、開始点と終了点の2点 (atomic parts) で構成される。これは、変化あるいは動作が起こることを表すために最小限となる時間要素とも捉えられる (Dowty 1979: 168-173; Beavers 2008: 248)。一方、持続的イベント (durative event) は開始点、終了点に加えて、中間的な時間点を含んでいるため、3つ以上のパーツに分けられる。このように、スケールやイベントは、原子的なパーツが2つなのか、3つ以上なのかの二つの主要なタイプで区別される。

- (11) 単純スケール (simplex scale) : 2つの原子的なパーツからなる
 複雑スケール (complex scale) : 3つ以上の原子的なパーツからなる

(Beavers 2013: 691)

このように、スケールに伴う theme x の変化の指定される程度と、スケールの複雑性の程度の2つの性質によって、動詞述語は表1のように分類される。

表 1. スケール変化による動詞の分類

	Simplex scale	Complex scale
Quantized change	ACHIEVEMENTS <i>break a vase, kill Bill</i> (telic, punctual)	ACCOMPLISHMENTS <i>load the wagon, eat the apple</i> (telic, durative)
Nonquantized change	N/A	DEGREE ACHIEVEMENTS <i>cool the soup</i> (change, atelic, durative)

(Beavers 2013: 692 より改変)

次節では、このような分類を導入し、本稿で扱う複合動名詞と複合動詞に出てくる V2 について調べる。

3. 複合動名詞と複合動詞の V2 に見られる意味的な特徴

3.1. 本稿の方針

複合動名詞のデータについては、容認性の高い 68 語を用いた⁵。複合動名詞の V2 には、①複合動名詞でも複合動詞⁶でも使われる V2 (例:「入れる」—「出し入れ」「押し入れる」)と②複合動名詞でしか使われない V2 (例:「痩せる」—「着痩せ」)の2種類がある。以下では前者を複合動詞・動名詞両方可可能なグループ、後者を複合動名詞のみ可能なグループとする。次に、この二つのグループには意味クラスの違いがあるのかを見ていく。

3.2. 分類

2.2 節に示した「状態変化の量子化」と「スケールの複雑性の程度」の二つのパラメータにより、複合動名詞に出てくる V2 を分類する。分類する際の基準として、状態変化が量子化される場合は、完結性を持つため、2 節の時間副詞のテストを使い判断できる。また、「スケールの複雑性」に関して、変化が瞬時的なのか、持続可能なのかによって決まる。「泣く」、「泳ぐ」のような状態変化を持っていないものは、検討の対象から外す。V2 が状態変化動詞の場合、状態変化が量子化されるか (例:「閉める」、「死ぬ」)、または変化の段階性があるか (例:「下げる」、「冷える」) によって、表 2 に示す A タイプと C タイプに分かれる。また、単純スケールか複雑スケールによって、A タイプと B タイプに分けられる。

⁵ このとき、「貸し出しする」のように複合動詞(「貸し出す」)も可能な組み合わせは考察対象から除外している。

⁶ 『複合動詞用例データベース』に集められたデータを利用している。(http://csd.ninjal.ac.jp/comp/)

表 2. V2 に対する分類

	単純スケール	複雑スケール
状態変化が 量子化される	A: 閉める、死ぬ (完結的、瞬間的)	B: (その本を) 読む、書く、食う (完結的、継続可能)
状態変化が 量子化されない		C: 下げる、痩せる、冷える (非完結的、継続可能)

表 2 に示したように、3 種類のパターンがありうる。

- A: 状態変化が量子化され、かつ単純スケールを持つもの
- B: 状態変化が量子化され、かつ複雑スケールを持つもの
- C: 状態変化が量子化されず、かつ複雑スケールを持つもの

このうち、A、C の 2 つのタイプは状態変化動詞に対応する。B タイプは漸進主題動詞、作成動詞に対応すると思われる。複合動詞・動名詞両方可可能なグループと複合動名詞のみ可能なグループに属している動詞は表 3、表 4 のようになる。

表 3. 複合動詞・動名詞両方可可能なタイプに使われる V2 (タイプ数)

	V2	複合動詞	複合動名詞
状態変化 自動詞	入る	消え/食い/染み入るなど (44)	出入り (1)
	起きる	飛び/跳ね起きる (2)	寝起き (1)
	降りる	駆け/飛び/舞い降りるなど (12)	乗り降り (1)
	隠れる	逃げ隠れる (1)	見え隠れ (1)
	来る	迫り/流れ/寄せ来るなど (15)	行き来 (1)
	下がる	食い/垂れ/吊り下がるなど (11)	上がり下がり (1)
	沈む	打ち/泣き沈む (2)	浮き沈み (1)
	死ぬ	溺れ/凍え/焼け死ぬ (3)	討ち死に (1)
状態変化 他動詞	溜める	書き溜める (1)	買い/食い/寝だめ (3)
	張る	言い/突っ/見張るなど (6)	切り張り (1)
	増す	買い/積み増す (3)	建て/焼き増し (2)

位置変化 他動詞	入れる	押し/書き/差し入れるなど (75)	出し入れ (1)
	置く	書き/差し/据え/捨て置く (4)	買い置き (1)
	下ろす	吊り/投げ下ろすなど (38)	上げ下ろし (1)
	下る	駆け/漕ぎ/攻め下るなど (6)	上り下り (1)
	下げる	押し/切り/吊り下げるなど (13)	上げ下げ (1)
	取る	写し/買い/書き取るなど (70)	やり取り (1)
漸進主題 動詞	食う	貪り食う (1)	立ち/買い食い (2)
	飲む	貪り読む (1)	立ち/回し飲み (2)
	読む	貪り飲む (1)	立ち/拾い/走り/飛ばし読み (4)
作成動詞	撮る	写し撮る (1)	盗み撮り (1)

表 4. 複合動名詞にしか使われない V2

	V2	複合動詞	複合動名詞
状態変化自動詞	欠ける	なし	満ち欠け (1)
	縮む	なし	伸び縮み (1)
	冷える	なし	寝冷え (1)
	痩せる	なし	着痩せ (1)
状態変化他動詞	着る	なし	重ね着 (1)
	差す	なし	抜き差し (1)
	閉める	なし	開け閉め (1)
所有変化動詞	売る	なし	卸/受け/切り/叩き/投/量り売り (6)
	買う	なし	売り買い (1)
	借りる	なし	貸し借り (1)
漸進主題動詞	稼ぐ	なし	出稼ぎ (1)
作成動詞	書く	なし	走り/読み/崩し/添え書き (4)
	炊く	なし	追い炊き (1)
	縫う	なし	纏り縫い (1)

表 3、表 4 からわかるように、状態変化動詞のうち、複合動詞・動名詞両方可能なグループ、複合動名詞のみ可能なグループに使われるのは、反義語からなる「並列関係」のものになる傾向が見られる（「開け閉め」、「抜き差し」など）。また、「作成動詞」や「漸進主題動詞」は、複合動詞・動名詞両方可能なタイプにおいて、「読む」や「食う」、「飲む」が挙げられる。しかし、これらは「貪り読む／貪り食う／貪り飲む」のような複合動詞にしか出てこない。

また、「並列関係」の場合、「差す」、「閉める」のような状態が量子化され、単純スケールを持つようなものもあれば、「下げる」、「冷える」のような状態が量子化されず、複雑スケールを持つようなものがある。一方、漸進主題動詞と作成動詞は状態が量子化され、複雑スケールを持つものであり、このようなものは複合動名詞になる傾向が見られるが、生産性が高いわけではない。以上のことを表5にまとめる。

表5. 複合動名詞と複合動詞のV2の分布の傾向

状態変化の量子化	スケールの複雑程度	複合動名詞	複合動詞
○	×	△（並列関係型になる傾向）	○
○	○	○	△
×	○	△（並列関係型になる傾向）	○

（△：特定のパターンを表す）

表5からわかるように、状態変化の量子化とスケールの複雑性の程度の二つのパラメータの違いにより、動詞が複合動名詞を構成するか、複合動詞を構成するかは完全に線引きができないが、一定の傾向が見られる。まとめると、状態変化の量子化とスケールの複雑性が両方満たされる場合、複合動名詞に出てくる傾向があるのに対して、複合動詞を作りにくい。一方、状態変化の量子化とスケールの複雑性がどちらか一方しか満たされない場合、特定のパターン（並列関係）の複合動名詞に集中するのに対して、複合動詞にはそのような制限が見られない。

ここまでは動詞の状態変化と瞬時/継続というアスペクトの二つの側面から、複合動名詞と複合動詞のV2の違いを考察した。次は事象構造の側面に目を向け、表5で示される違いは事象構造の面から裏付けられることを論じていく。

4. 事象構造からの意味分析

4.1. 原因事象と結果事象からみる

結果状態が含まれる達成動詞は、動詞述語の意味クラスとして均一的な性質を持たないことが指摘されている（Rappaport Hovav (2008)、Rothstein (2012) など）。どのように均一ではないのかに関しては具体的に2つの立場が挙げられる。Levin (2000) は、使役関係（cause relation）を表す原因事象と結果事象の間で、それぞれ独立したイベントとして存在しうる、使役事象になるものとならないものがあるとする。「状態変化他動詞」と「漸進主題動詞」では、それぞれ(12)と(13)に示すように、例えば「花瓶が壊れた」というイベントは「落とした」のような独立したイベント（independent event）によって引き起こされることも、引き起こされないこともありうるが、「サンドイッチが食べられた」というイベントでは「ジョンがサンドイッチを食べた」というイベントしか喚起されない。原因的に独立した別のイベントに関連しているとは想定しがたい（by以下が原因事象を表す）。

(12) John broke the vase by dropping it on the floor.

(13) *John ate the sandwich by eating it.

(Rothstein 2004:103)

さらに「作成動詞」についても、「漸進主題動詞」と同じように、「状態変化他動詞」の分析が適用できないことが指摘されている。例えば、「作成動詞」として、*bake a cake* では、*bake* という特定された行為なしには *cake* は存在しないという関係が成り立つ。

一方、Rothstein (2012) は、達成動詞を、活動 (ACT) が語彙的に指定されている (lexically specified) かどうかによって、さらに下位分類をしている。例えば、「漸進主題動詞」の場合、*read the form*, *read the exam*, *read War and Peace* はいずれも読むという活動を指定する。それに対して、*open a window*, *open a jar of jam*, *open a bottle of wine* のような「状態変化他動詞」の場合、結果だけを指定しているから、どういう活動をするかは動詞の意味に含まれない。つまり、*open* という行為における活動の仕方は語彙的には指定されていないのに対して、*read* という行為における活動は語彙的に指定されている。

以上見たように、両立場で達成動詞の扱い方が異なるが、実質的にどのような下位分類があるのかに関しては、共通するところがあると思われる。要は、「状態変化他動詞」の場合、活動が語彙的に指定されていないので、原因事象が結果事象と独立して起こることが可能であるが、「漸進主題動詞」、「作成動詞」の場合には、原因事象がすでに語彙的に指定されているので、結果事象と独立しては起こりえないのである⁷。

4.2. 日本語の場合

日本語において、達成動詞の原因事象と結果事象が独立事象として働くかどうかは、自他交替が可能かどうかによってテストできる。Levin and Rappaport Hovav (1995) は、*break* のような例では、原因事象がどのようなものであるかが未指定 (-specified) であるため自他交替が起こるのに対し、*cut* のような例では、事象の指定がある (+specified) ため、自他交替が起こらないと想定している。日本語の自他交替も同じように統語的な振る舞いが見られる。例えば、

(14) 茶碗を割った—茶碗が割れた

自他交替できるかどうかをチェックすると、表 3、表 4 における「状態変化動詞」は自他交替するものが多く、原因事象が指定されていないことが考えられる。しかし、原因事象の未指定はあくまで自他交替が成立するための十分条件であると思われる。自他交替できない場合、原因事象が指定・未指定の両方の可能性がありうる。例えば、「殺す」「刻む」

⁷ 「作る」のような活動が語彙的に指定されていないケースもあり、このような例外についてまた別途に検討する必要があるが、「作る」は動詞複合語をあまり作らないため、ここは深く立ち入らない。

は自他交替できないが、前者は原因事象が未指定であり、後者は原因事象の指定がある。

原因事象と結果事象となる使役事象に独立して起こることが可能なのかを、by フレーズに相当する原因事象が表せる「によって」に言い換えられるかどうかによってチェックする。

- (15) a. 木を倒す一木を切る/押すことによって倒す。
 (「切る/押す」ことは「倒す」ことに依存せず、独立して起こりうるイベント)
- b. 書く一筆を動かすことによって字を書く。
 (「筆を動かす」ことは「書く」動作に依存している)
- c. 縫う一針と糸を使って手を動かすことによって雑巾を縫う。
 (「針と糸を使って手を動かす」ことは「縫う」動作に依存している)

以上のテストに従えば、任意の達成動詞について、活動を表す原因事象が指定されているかどうか判断できる。その結果、「状態変化動詞」の方は原因事象の様態が指定されていないのに対して、「作成動詞」、「漸進主題動詞」ではそれが指定されていることがわかった。これで、二つのグループが基本的に分けられる。

複合動名詞と複合動詞は、V2 に原因事象の様態が指定されているかどうかという点で違いが見られる。このような違いにより、以下のような V1 と V2 の語順が逆になる複合動名詞と複合動詞が説明される。同じ構成要素であっても、複合動名詞が複合動詞として使われることによって V2 が異なる。例えば、(16) のような例がある。

- (16) 「崩し書き」・「書き崩す」、「殴り書き」・「書き殴る」、「飛ばし読み」・「読み飛ばす」

これらのペアにおいて、複合動名詞の V2 (「一書く」、「一読む」) になるのは原因事象の様態が指定されているものである。このように、複合動名詞と複合動詞は、V2 の意味クラスに関して違いが見られる。また、同じ V2 でも、複合動詞に使われるか、複合動名詞に使われるかによって、V1 との間の意味関係が異なることもわかった。

本稿は、複合動名詞を成立させる要件、及び複合動名詞と複合動詞の違いを解明することを目的とする。Jackendoff (1990: 10) によると、語彙概念の区別は、意味述語および組み合わせの原則によって決まるとされる。つまり、複合動名詞と複合動詞の合成を論じる場合、どのような動詞が合成するのか、またどのような合成の仕方テンプレートが組み立てられるのかがポイントとなる。本稿は、合成に関与する動詞要素である主要部 V2 の意味特徴の違いを明らかにしたことにより、複合動名詞と複合動詞の語彙概念上の違いが存在すると示唆する。

5. 結論と今後の課題

本稿では、動詞の状態変化の量子化とスケールの複雑性というアスペクト上の意味特性を軸にして、複合動名詞と複合動詞の V2 に対して、意味分類を行った。その結果、完結性のある動詞の複合動名詞と複合動詞における分布の特徴を明らかにした。具体的には、Beavers (2013, 2008) が提案しているスケール変化による状態変化の量子化とスケールの複雑性によって動詞アスペクトの分類を導入することで説明を与えた。状態変化が量子化され、かつ単純スケールを持つ状態変化動詞、また状態変化が量子化されず、かつ複雑スケールを持つ状態変化動詞は複合動詞を形成する傾向が見られる。一方、状態変化が量子化される、かつ複雑スケールを持つような漸進主題動詞、作成動詞は複合動名詞を作る傾向が見られる。また、このような違いは、事象構造の面からの考察によっても裏付けられる。具体的には、原因事象が指定されるかどうかという点で、複合動名詞と複合動詞の V2 には違いが見られると分かった。本稿の考察により、動詞の意味クラスの違いは複合語の語形成にも反映されていることが明らかとなった。また、意味の観点から複合動名詞と複合動詞の違いに対する説明の有効性が示唆された。

一方、以下のようないくつかの問題点がまだ残されている。本稿で扱っている「V1+V2」型複合動名詞のうち、複合動詞としても使える複合動名詞（「貸し出し」タイプ）は考察対象に入れられていないため、複合動名詞と複合動詞で異なる制約に従うのかを明らかにするためには、「貸し出し」タイプの考察が必要だと思われる。また、複合動名詞全体の構造を解明するために、複合動名詞と複合動詞の構成要素の性質の違いを論じたが、これだけでは複合動名詞全体の構造解明にはなりえないため、語彙概念の合成にかかる制約に対して更なる考察が必要となる。これらを今後の課題とする。

参考文献

- Beavers, John (2008) Scalar complexity and the structure of events. In: Johannes Dolling, Tatjana Heyde-Zybatow and Martin Schafer (eds.) *Event structures in linguistic form and interpretation*, 245-265. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Beavers, John (2013) Aspectual classes and scales of change. *Linguistics* 51(4) :681-706
- Dowty, David (1979) *Word meaning and Montague grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Dowty, David (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67: 547-619.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic structures*. Cambridge: MIT press.
- Kennedy, Christopher (1999) *Projecting the adjective: The syntax and semantics of gradability and comparison*. New York: Garland Press.
- Krifka, Manfred (1998) The origins of telicity. In: Susan Rothstein (ed.) *Events and grammar*, 197-235. Dordrecht: Kluwer.
- Levin, Beth (2000) Aspect, lexical semantic properties, and argument expression. *Proceedings of the Twenty-Sixth annual meeting of the Berkeley*, 413-429.

- Levin, Beth and Rappaport Hovav, Malka (1995) *Unaccusativity: at the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge: MIT press.
- Levin, Beth and Rppaport Hovav, Malka (1998) Building verb meanings. In: Miriam, Butt and Wilhelm, Geuder (eds.) *The projection of arguments: lexical and compositional factors*, 97-134. Stanford: CSLI Publications.
- Levin, Beth and Rppaport Hovav, Malka (2013) lexicalized meaning and manner/result complementarity. In: Arsenijevic, Boban, Berit Gehrke and Rafael Marin (eds.) *Studies in the composition and decomposition of event predicates*, 49-70. Dordrecht : Springer.
- Rappaport Hovav, Malka and Levin, Beth (2010) Reflections on manner/result complementarity. In: Rappaport Hovav, Malka, Edit Doron and Ivy Sichel (eds.) *Lexical semantics, syntax, and event structure*, 21-38. Oxford : Oxford University Press.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Oxford: Blackwell.
- Rothstein, Susan (2012) Another look at accomplishments and incrementality. In: Violeta Demonte and Louise McNally (eds.) *Telicity, change and state*, 60-121. Oxford: Oxford University Press.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantic interface*. Dordrecht: Kluwer.
- Tenny, Carol (1995) How motion verbs are special: The interaction of semantic and pragmatic information in aspectual verb meaning, *Pragmatics & Cognition* 3 (1): 31-73.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. *The philosophical Review* 66: 143-160.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京：くろしお出版
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 東京：くろしお出版
- 影山太郎 (2005) 「擬態語動詞の語彙概念構造」 第2回中日理論言語学研究会予稿集
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114：37-83.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 東京：ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」影山太郎編『複合動詞の最先端』109-142. 東京：ひつじ書房

A Study on the Meaning Formation of “V1+V2” Verbal Compound Nouns in Japanese: Focus on Semantic Features of V2

Hui Li

lihui13041002@gmail.com

Keywords: “V1+V2” verbal compound noun, compound verb, telicity, scale change,
event structure

Abstract

This study examines the semantic features of component verbs in two types of compound words to elucidate the discrete conditions imposed on Japanese verbal compound nouns and compound verbs. V2, the second component verb in compound words, acts as the semantic head. With regard to semantic features, this study focuses on the change of state and punctual/durative aspectual property of V2 and evaluates whether verbal compound nouns differ from compound verbs in this respect. To this end, the differences between the two constructs are scrutinized, and these dissimilarities are illuminated through the use of Beaver’s (2013, 2008) predictive model of aspectual classes, which is grounded in theories of scalar change. This paper argues that the distinctions observed between the two forms of compounded words may be attributed to the extent of the specificity of the endpoint along the scale, and a scale’s mereological complexity with regard to V2. In addition, the differences pertaining to V2 in the two types of compound words are shown to be tied to differences in terms of event structure. For example, V2 can appear easily in compound verbal nouns if its causing event is lexically specified. In sum, this study concludes that the differences observed in a verb’s semantic class are also reflected in the process of the formation of the word. The outcomes of the study further suggest that a semantic approach is effective in determining the mechanism that differentiates compound verbal nouns from compound verbs.

(り・けい 東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員)